

南台人文社會學報 2015 年 5 月

第十三期 頁 111-131

以性差的觀點來讀小島信夫的『擁抱家族』

楊琇媚*

摘要

小島信夫的代表性作品『擁抱家族』發表於昭和 40 年 7 月，隔年便獲得第一屆谷崎潤一郎獎。

戰後因為美國帶來了民主主義的思想，因此廢除了明治時期以來的家父長制度，而女性也從「家」獲得了解放。彷彿呼應了這樣的時代背景似的，作品中所描寫的主人公俊介其身為父親的存在感與威嚴十分的薄弱。相對於此，所描寫的時子是，雖犯了通姦之過，但絕不承認通姦是過錯的頑固妻子。也因此先行研究中多認為在三輪家夫妻的權力關係是顛倒的，且俊介身為父親卻不具父親的權威。但是，在此筆者提出的疑問是，三輪家的夫妻的權力關係在本質上真的是顛倒的嗎？也就是說，其實俊介和時子分別都有著受到傳統的規範束縛的一面。因此，本論文以性差的觀點來探討作品中所描寫的夫妻的階層結構及其關係性，來解開上述的疑問。最後也進一步探討三輪家崩壞的主要原因，試圖賦予本作品一個新的解讀觀點。

關鍵詞：性差、家父長制、戰後、民主主義、權力關係

*楊琇媚，南臺科技大學應用日語系助理教授

電子信箱：mayyang@stust.edu.tw

收稿日期：2014 年 09 月 15 日；修改日期：2015 年 03 月 17 日；接受日期：2015 年 05 月 19 日

STUST Journal of Humanities and Social Sciences, May 2015

No. 13 pp.111-131

ジェンダーの視点で読む小島信夫『抱擁家族』

楊琇媚*

要旨

小島信夫の代表作と言われる『抱擁家族』は、昭和40年7月に『群像』に発表され、翌年、第一回谷崎潤一郎賞を受賞した作品である。

戦後アメリカがもたらした民主主義の思想により、明治以来の家父長制度が廃止され、女性も「家」から解放されたと言われる。こうした時代背景に呼応するかのようには、主人公である俊介の父親としての存在感や権威は極めて薄く描かれているのに対して、時子は姦通という「過ち」を犯してしまっただが、その「過ち」を絶対に認めない強情な妻として描かれている。そのため、三輪家では夫と妻の権力関係が逆転し、俊介は夫として、父親としての権威を持たないキャラクターとして描かれているとよく指摘されている。しかし、ここで問題提起したいのは、果たしてこの男女の力関係が実質的に逆転しているのかということである。つまり、俊介と時子はそれぞれ、従来の慣習にとらわれている一面も覗かせるのではないかと思われるのである。よって、本稿では、作品が描き出す夫婦における階層構造や関係性をジェンダーの視点で捉えることによって、以上のような問題意識を明らかにしていきたい。最後に、三輪家が崩壊する要因も追究することとし、作品への新たな読みを提示したい。

キーワード：ジェンダー、家父長制、戦後、民主主義、力関係

*楊琇媚，南臺科技大學應用日語系助理教授

電子信箱：mayyang@stust.edu.tw

收稿日期：2014年09月15日，修改日期：2015年03月17日，接受日期：2015年05月19日

ジェンダーの視点で読む小島信夫『擁抱家族』

1. はじめに

小島信夫の代表作と言われる『擁抱家族』は、昭和40年7月に『群像』に発表され、翌年、第一回谷崎潤一郎賞を受賞した作品である¹。主人公の三輪俊介は外国文学翻訳家兼大学講師で、彼の家庭には妻の時子と二人の子供がおり、しかもマイホームを持つという、いわゆる核家族という設定である。しかし、このような三輪家はやがて、妻のアメリカ兵士ジョージとの姦通、ガンの発覚とその死を通して、崩壊の危機に直面していく。この作品は戦後日本文学を代表する傑作の一つという高い評価も寄せられている²。

もっとも代表的な『擁抱家族』論として、江藤淳の『成熟と喪失——“母”の崩壊——』（河出書房新社、1967年）が挙げられる。江藤氏は、俊介と時子の関係を、「夫」と「妻」ではなく、「日本の母と息子の関係」として見ており、「俊介は無意識のうちに、妻とのあいだにあの農民的・定住者的な母子の濃密な情緒の回復を求めている³」と述べている。この江藤の論以降、この作品の論点は、時代性や夫婦の間に見られる力関係に重点が置かれるようになっていった。

戦後の日本が、アメリカ主導で組織された連合国軍によって占領

¹この作品は、『群像』に発表される前の1961年春、書き下ろし長篇「いつかまた笑顔を」として書き始められたが、未完で放棄され、妻の死、再婚を経て、四年後に『群像』に一举掲載されたという。（上野千鶴子他著『男流文学論』筑摩書房、1992.1）

²例えば、作品が発表された年の『群像』の「創作合評」では次のような会話がある。（山本健吉・福水武彦・本多秋五「創作合評」『群像』1965.8）P.171

「本多 大事なテーマらしい。これだけの枚数を費やして、ざらにない力作だと思います。

山本 いい作品だね。

本多 ぼくは相当いい作品だろうと思うが、「擁抱家族」とあるのは「崩壊家族」みたいな感じだけれど、どうかね？」

³引用は、江藤淳『成熟と喪失——“母”の崩壊——』（講談社、1993.10）による。P.37

されたことは周知の通りである。本作品からは、日本人のアメリカあるいはアメリカ人に対する卑屈で屈折した感情が随所に読み取れるため、従来そうした時代背景を踏まえた上での読みが多かった。例えば、山田博光は、本作品には「単なる家庭小説にとどまらず、妻の姦通の相手にアメリカの青年を選び、戦後の日本の文化と日本人の混乱に及ぼしたアメリカの影響を考えさせるなど、文明批判的意図もひそませている」⁴と述べている。また、佐伯彰一は「これ（時子とジョージの姦通事件を指す。筆者注）がじつは象徴的比喩的な意味で『家の中までアメリカが踏み込んできた』ということ、戦後の日本の時代をそういうかたちで象徴されたのだ」⁵と作品を位置付けている。さらに大貫徹は、この小説には二つのアメリカ、すなわち、家政婦みちよがもたらすアメリカと、主人公である俊介がもたらすアメリカがあることに注目し、そのジェンダー的な違いに着目することによって新たに表象文化論的な分析を行っており、興味深い論点を提示したのである⁶。

一方、戦後アメリカがもたらした民主主義の思想により、明治以来の家父長制度が廃止され、女性も「家」から解放されたと言われる。こうした時代背景に呼応するかのよう、主人公である俊介の父親としての存在感や権威は極めて薄く描かれているのに対して、時子は姦通という「過ち」を犯してしまっただが、その「過ち」を絶対に認めない強情な妻として描かれている。このような男女不均衡の力関係について、磯田光一は『島崎藤村』（平野謙）と比較して、「『島崎藤村』の男尊女卑的な家父長型家庭像から、『抱擁家族』の女尊男卑的な家庭像への転位」において、「二十年の間に男女の力関係がほとんど逆転して

⁴山田博光「小島信夫——『抱擁家族』を視座として——」『国文学解釈と教材の研究』1969. 2）P. 66

⁵佐伯彰一「小島信夫『抱擁家族』——アメリカの影」（『文学における家族の問題』東洋大学井上円了記念学術センター編、すずさわ書店、1999. 4）P. 180

⁶大貫徹「表象としてのアメリカ『抱擁家族』（小島信夫）論」（『Litteratura』名古屋工業大学共通講座教室言語文化講座、2002. 6）

いる」と語っている⁷。この磯田氏の論説に示されるように、三輪家では夫と妻の権力関係が逆転し、俊介は夫としての権威も父親としての権威も持たないキャラクターとして描かれているとよく指摘されている。

しかし、ここで問題提起したいのは、果たしてこの男女の力関係が実質的に逆転しているのかということである。つまり、俊介と時子はそれぞれ、従来の慣習にとらわれている一面も覗かせているのではないかと思われるのである。よって、本稿では、作品が描き出す夫婦における階層構造や関係性をジェンダーの視点で捉えることによって、以上のような問題意識を明らかにしていきたい。最後に、三輪家が崩壊する要因も追究することとし、作品への新たな読みを提示したい。

2. ジェンダーの規範にとらわれる時子

前にも少し触れたが、戦後家父長制度が廃止され、男女の平等が唱えられるようになった。その結果、「家」という名の抑圧からの解放、家事労働の軽減、自由時間の拡大等々の条件が、女性の性的自由の実現をもたらした。時子の姦通事件は、その性的自由の実現の一つとして見る事ができるのである。また、夫の優しさに対し好意を持って応えたりせず、浮気が発覚した後も「こんなことあんたはたえなくっちゃ駄目よ。冷静にならなくっちゃ」と言って、少しも罪悪感を感じていないような態度を見せる時子は、いかにも自由奔放で新しい女性かのように描かれている。しかし、果たして彼女は本当に新しい女性になり切ったと言えるのだろうか。

俊介が仕事で外国へ立つことになった場面を見てみよう。出発の前々日、時子は彼の部屋にやって来て、次のような会話を交わす。

⁷磯田光一「現代小説の転位—表現構造と文体の問題—」(『文学界』1967.12) P.125

「子供達のことどうするのよう」

彼は仕事をしている手をちよつととめた。

「まだ何の相談もしてないじゃない」

「そのときそのとき、手紙で相談すればいいじゃないか。ぐずぐずいうなら、僕に行くな、といえよよかった」

「あなたって分からない人ね」と時子は泣き出した。(P. 25)

この場面から読み取れるのは、「女」として「夫」に甘えたい一方で「妻」や「母親」という役割を捨てきれずにいる時子の葛藤である。夫は家庭の外で収入を獲得し、妻は家事と育児に専念するという「性役割分業」の近代家族では、女性はおっぱら「妻」や「母親」という役割を演じてきた。そしてそれは、男性に代表される社会や、夫から求められる役割でもあった。時子は、夫の前では一人の女性でありたいし、女として夫に甘えたいけれど、母としての役割を捨て切れずにいるため、結局自分の甘えたい気持ちを夫の俊介に十分に伝えられなかったのである。

そして、外国へ行ったあと毎週のように届く時子からの手紙について、俊介は次のように言っている。

その中にいつも子供のことで細々としたことが訴えてあって、それを外国の郵便受の前でひろげてよむと俊介は気がふさぐことが多かった。甘い言葉が一つもなかった。(P. 26)

この描写からは、子どものことばかり話す時子に対して、俊介が強い不満を持っていることが伺える。時子の手紙には子どものことばかり書かかれていて、夫に甘える言葉がないということは、近代家族

の特徴の一つである「子ども中心主義」の象徴として見て取れる⁸。また、「役割分担を支える上での夫婦愛の相対的な希薄さと母性愛の圧倒的な強さ⁹」に代表される日本特有の近代家父長制の象徴でもある。

この作品の中の時子が、性モラルからの逸脱者というキャラクターとして設定されているという点から見ると、確かに彼女を新しい時代の新しい女性として見ることができる。しかし上の引用部分からは、彼女もまた、近代家父長制下で求められてきた母親役を演じることを、完全に放棄しきれないでいる葛藤を抱えたキャラクターとして描かれている、とも見て取れるのである。

実際、時子の入院時、三輪夫婦が仲人したことのある清水が見舞いに来たとき、時子は清水に「女は子供が、小さいときには、うちにおいて、もらいたいのよ」という言葉を発した。これは、時子が病気の末期に発した言葉なので、おそらく彼女の本音であろう。ここでも、時子が伝統的な母という役割を重視する観念を持つ人間であることが伺える。

このような母のイメージを強く感じ取るもう一つの描写がある。俊介は息子の良一が女中の正子といかがわしい関係を持っていることに気付き、すぐさまそのことを時子に告げる。すると、時子が早速正子を解雇し、次のように言うのである。

うちの中で、あんなことされて、たまるもんか。好きだなんて。薄っぺらな胸をした、女のくせに。あんな、明日連れて行って帰らせてよ。あの娘はまた良一に何かいってくるかもしれないわよ。

⁸落合恵美子は近代家族の特徴を次の八点にまとめる。「(1) 家内領域と公共領域の分離／(2) 家族成員相互の強い情緒的關係／(3) 子ども中心主義／(4) 男は公共領域・女は家内領域という性別分業／(5) 家族の集団性の強化／(6) 社交の衰退／(7) 非親族の排除／(8) 核家族」(『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989. 12、P. 18)

⁹瀬地山角『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』(勁草書房、1996. 11) P. 152

(P. 62)

ここでは、あたかも敵から子を守る強い母親かのような姿が見られる。ちなみに、求人広告を見て三輪家を訪ねてきた正子に対する初対面の印象について、時子は「胸のうすい、へらへらへらっと笑う、鼠のように走る、そして恐らくメンスもほとんどしみていどしかない女（傍点は原文）」と批判する。ここでも、母の象徴としての乳房（＝胸）や女性の性の象徴としての月経（＝メンス）に拘る時子の一面が見て取れる。さらにそれを裏付けるかのように、「私は丈夫だし、それにメンスだって誰よりも多いんだから」と言ったり、「まだメンスはあるんだわ。私になくなれといたってムリよ」と月経に拘る言い方を繰り返す。なぜ、時子はそれほど月経に執着しているのだろうか。先にも触れたように、月経は女性の性の象徴であり、生殖機能とも関連しているため、「女性の子どもを産める能力を象徴する機能¹⁰」でもある。

明治維新以来、家長は「家」を継承するために、しかるべき数の子どもを産ませることが重要なことであった。そのため、家父長社会の枠組みの中では女性が道具化されていたことが自明であり、女性に子どもを産む役割を強く求めてきた。したがって、社会的に「産むこと」が強く求められてきた女性にとって、月経は重要な意味を持つと考えられる。おそらく時子にとって、女性に備わったかけがえのない機能とも言える月経があることは、「女性性」ないし「母性性」を象徴するものであり、そこにしか自分の存在意義を見出せないのであろう。いかにも家父長制度において植え付けられた考え方である。

確かに、時子は家事を疎かにするし、夫にも従順ではないため、

¹⁰川瀬良美「月経とジェンダー」（『淑徳大学大学院紀要』2004. 3）P. 59

いわゆる良妻賢母の形象には程遠い人間像として描かれているように見える。しかし、このように様々な場面で、時子のジェンダーの規範にとらわれている一面が見て取れるため、時子は決して「古い家庭のしきたりなどになじまぬ、非伝統的なタイプの女性¹¹⁾」とは言いきれない。のちに詳しく述べるが、これが夫婦関係の悪化と、三輪家崩壊の一因にもなると考えられるのである。

3. 家父長的な一面を持つ俊介

戦後の日本の家族は大きく変貌したとよく指摘される。『抱擁家族』で描かれている家族は、まさしくこの「戦後の家族」である。渡辺洋三によれば、戦後の激的な変化の中で一番大きく変わったのは、親子関係である¹²⁾。すなわち、戦後の諸条件の変化、例えば政治的、社会的、思想的な変化により、かつての親の家父長的権威はくずれたということである。そして、二番目に大きく変わったのが夫婦関係である。つまり、戦後における女性の経済的、政治的、社会的地位の一般的向上により、夫に対する妻の地位も向上したということである¹³⁾。

確かに、作中での俊介は、子供に対して一度も親としての権威を見せたことがないし、妻に対しても、不満を感じているにもかかわらず、なかなか妻に向かってその感情を表明することができない。これは、「戦後における家父長権の崩壊、あるいは女権の拡大の所産¹⁴⁾」と言えよう。しかし、俊介の家父長的な姿勢や価値観は、果たして本当に完全に消えてしまったのだろうか。この点について、以下のように見ていきたい。

¹¹⁾平野謙「『抱擁家族』の新しさ」(『小島信夫全集 5 月報』講談社、1971. 6) P. 3

¹²⁾渡辺洋三「戦後の家族問題と家族法—憲法制定十五年の歴史と現実」(『世界』1962. 6) P. 111

¹³⁾注 12 に同じ。P. 111

¹⁴⁾磯田光一「小島信夫の文学—その時代感覚を中心に」(『小島信夫 擁抱家族 解説』講談社文庫、1978. 6) P. 251

家政婦のみちよから妻がジョージと姦通したことを告げられた俊介は、「これから何をいい、何をしたらいいだろう。そういうことは、どの本にも書いてはなかったし、誰にも教わったことがない」と困惑しながらも、即座に外出中の妻を呼び戻し、彼女に暴力を振ってしまう。

女性への暴力は、男女の関係が不平等であるほど発生すると言われる。また、それが「男性が女性を支配し、差別を維持するメカニズムになっている¹⁵」と見なされている。戦後、戦前にはあった「姦通罪」が廃止されたため¹⁶、俊介は妻の姦通を悪として断罪することができず、途方に暮れている。だがこのとき、俊介が取った行動は意外にも、戦前の家父長制度ではよく見かけられた妻に対する暴力なのである。俊介のこうした行為はまさしく家父長的価値観によるものだと言えよう。

もう一つ俊介が家父長的な態度を取る場面を見てみよう。それは、当事者の三人が銀座の喫茶店で対面するときの描写である。妻の姦通に対して咎めることさえできず、成す術もない俊介であるが、妻の姦通相手に対面すると、彼は「不快になるほどブッキラボウに答えた」り、「高飛車に出ようと、英語を思いきりくぎって、発音した」り、終始怒りの態度をとり続け、まるで被害者家族のようである。川嶋至は「姦通一般を男の側から妻が寝とられるという被害者意識で捉えていくところに、小島氏独自の発想形式を認める¹⁷」と述べているが、では、一体このような男側の被害者意識はどんな意味を持つのであろうか。

¹⁵服部範子「ジェンダーの視点からみた夫婦関係——「夫（恋人）からの暴力」に関連して——」（『家族心理学年報 14 21世紀の家族像』日本家族心理学会編、1996.5）P.183

¹⁶姦通罪は、1947年5月3日に施行された日本国憲法の14条により廃止された。

¹⁷川嶋至「『抱擁家族』」（『国文学解釈と鑑賞 特集小島信夫と安岡章太郎』1972.2）P.118

角田由紀子は、『性差別と暴力』で次のように指摘している¹⁸。

かつて女性は夫や父親の所有物であった。結婚は父から夫への「娘」の贈与ないしは交換であった。娘は動産であった。女性が結婚して姓を変えるのは、動産である牛の持ち主が変わると額に新しい持ち主の名前が焼き印で入れられるのと起源は同じである。このように、結婚が「娘」という動産の移転であった時代には、強姦は父や夫の所有物である娘や妻を、非所有者が性的に使用することである。そこで、強姦罪は、所有権を侵害する犯罪（財産犯）と考えられていた。被害者は当の女性ではなく、彼女の所有者である男性であった。今でも、男性が自分の妻や親しい関係にある女性が強姦されると、「自分の」妻、女に手を出したと、自分が被害者であるかのように憤慨することがあるが、これは深く潜んでいる所有者意識のなせる業であろう。女性を自分の所有物とする歴史的に培われた意識を捨て切れずに、どこかに隠し持っているのであろうか。

つまり、父権社会では、女性は夫や父親の所有物であり、一旦女性が性的に犯されると、被害者は当の女性ではなくその所有者の男性であることになる。そのため、男性が抱く所有者意識の業で、思わず「被害者意識」が生じてしまうのである。もちろん、作品では「強姦」ではなく「姦通」の設定となっているように見える。しかしよく考えてみると、ジョージとの姦通の場面についての当事者による客観的描写が見られないし¹⁹、当事者二人の証言にも大きな食い違いがあるように見える。真相は明らかにされていないが、時子が犯されたという

¹⁸角田由紀子『性差別と暴力』（有斐閣、2001.4）P.184

¹⁹川路重之もこの点について、次のように述べている。「最大のテーマと見られる時子の姦通は脇役たちの不完全な口を通して語られるだけで、事実のはっきりしないのである。」（「小島信夫の印象——「擁抱家族」のメイキング」『文学』1990.1、P.93）

ことも有り得るのではないだろうか。ともあれ、ジョージとの対面の場面における俊介の描写からは、前述の角田氏の言葉にあるように、俊介が『自分の』妻に手を出した、自分が被害者であるかのように憤慨していることを読み取ることができる。これは、俊介の中に「時子は自分の所有物である」という意識があることの現われであり、かつ、そこには家父長的な価値観が潜んでいるように思われるのである。

更に、俊介は妻の姦通事件が発覚後、「僕だって、あの男のようにしたことはある。その代わりその女を喜ばせてやった」と言い、いかにも自慢するかのように自身の浮気を告白している。ここでは、「俊介には時子の姦通だけを『不快』に思う²⁰」「性の二重規範」、いわゆるダブル・スタンダードが存在していることは言うまでもない。そしてこのことは、戦前からの「性の二重規範」が戦後もなお生き続けていることを物語っているだけでなく、夫の「浮気」には寛大だが、妻の「浮気」には厳しいという伝統的な家父長的（男の女に対する優越）性規範の残存をも語っているように思われる。

また、「その女を喜ばせてやった」という言葉が象徴的に示すように、「ジョージの若い精力に溢れた身体のことを思い浮かべ」る俊介は、仕事と同じように、性においても「業績」によって自己を確認しようとしている。実際、時子とのセックスの場面での「俊介の予測どおり不首尾に終わった」という描写からは、彼は性不能であり、性に関する自信を持っていないことが分かる。しかし、性的自信喪失から自信回復したかのような描写もある。それは夫婦の最後のセックスとなる次のような場面である。

俊介は妻の身体の上へ、十分に両手で自分の身体を支えながら、

²⁰石原千秋「母・家庭・性の変容」（『講座 昭和文学史第四巻』有精堂編集部編、1989.1）P. 25

圧迫しないように、身体を重ねた。

ヒゲが彼のそりあげた口のあたりに食いこんできた。それは下の方の部分もおなじで、自分の毛がおしつぶされた。突起しているところが、嘗^{ママ}ってないほど大きくふくらんでいた。そのふくらみに彼女は堪えかねていたと見える。こんなふうに彼に愛撫されることをひとえにのぞんでいる姿は見たことがない。(中略)「こういうものとは、知らなかったわ」と時子は、三文雑誌のどこかに書いてあるようなことを口走る。それではやはりジョージとも、こんなことはなかったのだ。“Nothing happened”とあの男がいったのは、あるいはこういう満足がなかったという意味だったのか。(中略)この快樂は何だろう。肉体的なものだろうか。それとは違う。おれはようやく征服しかかっているのだ。それだけではない。時子が女として愛撫にこたえるだけのものを持ち合わせていなかったことを、知ったということでもある。おれが悪かったんではない。悪かったのは時子、お前の方なのだ。(下線部は筆者による。)P. 75

この描写は、むろん、「性による夫婦の最終的な和解と許しの象徴²¹」として読めるのであろう。しかし、「女が性的快樂、オルガズムを男に依存してきたからこそ、男に従属せずにはおれなかった²²」という指摘があるように、ここでは性行為における男の女に対する優越感や支配性を表しているのも確かである。また、上述したように性的自信を持たない俊介は、これまでに感じたことのなかったオルガズムを得た時子が発した「こういうものとは、知らなかったわ」という一

²¹上野千鶴子他著『男流文学論』(同前掲書) P. 251

²²大越愛子「フェミニズムは愛と性を語られるか」(山下明子編『日本的セクシュアリティ—フェミニズムからの性風土批判—』法蔵館、1991. 12) P. 175

言により、“Nothing happened”というジョージの言葉の意味を悟り、自信を回復する。つまり、俊介がこれまで抱いていた不安、猜疑、自信のなさなどの様々なマイナスの情緒はこの瞬間に消え去り、完全に救われたかのようなのである。しかし、俊介がセックスによってしか自信を取り戻せなかったことを表すこの描写には、実は、「ベッドの中の家父長制」²³や「夫婦という関係の中にある力関係の偏り」²⁴、すなわち夫と妻あるいは男と女との間にある構造的な力関係の不均衡が潜在し、家父長制の一環である性支配の要素も潜んでいると思われるのである。

4. なぜ家族が崩壊するのか

従来の研究では、三輪家は時子の不倫や彼女の病死によって崩壊しかけていくというように論じられてきた。しかし、なぜ時子が不倫に走ったのかということ自体はあまり探究されなかった。ここでは、二人の夫婦関係に注目して、家族が崩壊する原因を追究してみたい。

俊介と時子の人物のモデルは、小島自身と最初の妻キヨ夫人であると言われている。²⁵もしそうであれば、俊介と時子はおそらく恋愛の末に結ばれた夫婦であろうと考えられる。しかし、いくらかつてはお互いに恋愛感情を持っていた仲だったとはいえ、結婚して二人の生活が始まると、お互いに不満を感じるようになるのも当然であろう。時子は「私が何かいいだせば、すぐに私の口を封じようとするじゃない。あんたにはひとの話をきいてやろう、という気持がないのよ」というように、優しく妻のいうことに耳を傾けてくれない俊介に対して不平をもらす。一方、こんな妻の不満に対して、俊介の心境が次のようにも語られている。

²³金井淑子『女性学の挑戦—家父長制・ジェンダー・身体性へ—』（明石書店、1997.5）P.152

²⁴注23に同じ。P.152

²⁵上野千鶴子他著『男流文学論』（同前掲書）P.247

俊介はそうかもしれないと思った。彼は必ずしもひとの話をきかぬ方ではないが、彼女の話はきかなかつた。彼女の話は子供の教育のことや、文化生活の向上といったようなことで、昔のようなよその女の悪口をいうようなことさえない。よその家より「立派」になろう、よその家に負けまいというための計画で、それが叶わぬとすれば愚痴をいうだけのことだ。(P. 27)

この描写から、時子は「感情的で論理的な話が出来ないラポートトークの女性²⁶」であると考えられる。また、俊介はこのような時子に不満を感じていることが分かる。一方、時子の不満からは、おそらく俊介は妻の「『話を聞かない男』レポートトークの男性²⁷」であると推測される。要するに、二人は共通の体験を持たず、話題やコミュニケーション能力を共有していないため、対等で共感的な関係を築くことができない。そのために、夫婦関係に亀裂が入ってしまったと考えるのが妥当ではないだろうか。

ところで、時子の姦通事件が発覚したあとのある日、俊介が自分の中の変化に気づく場面がある。

彼の視線は時子の首筋のあたりと、それから組んだ脚に注がれていた。(中略) その若者の入念な愛撫をうけたのだ、ほんとに計画的だったのかもしれない、と俊介は思った。しかしそれを憤るよりも、そこにひとりの女がいるということのまぶしさに圧倒されていた。／この女は彼がいま感じている眩しさを、自分でも認

²⁶ 柏木恵子他『家族心理学への招待 [第2版]』(ミネルヴァ書房 2009. 1) P. 79

²⁷ 注 26 に同じ。P. 79

めたいと思い、ひとにも認められたいと長い間思ってきたのだろうか。彼はそれを拒否してきた。眩しいと思わず滑稽だと思ったのだろうか。(P. 22)

前述したように、時子は母としての役割にとらわれているものの、一方では一人の女でありたいという願望も持っている。しかし、俊介には長い間無視されてきた。つまり、二人の関係はまさに、典型的な日本的夫婦関係として描かれているのである。典型的な日本的夫婦関係における夫は、夫婦の親密さに重きをおかず、一旦結婚してしまうと妻を女性として扱おうとしなくなる。言い換えれば、『妻』や『母』であるという役割的ポジションは保障するが、女性を一人の性的な存在としてはみない²⁸」のである。しかし、時子の浮気を知ってはじめて、俊介は「母」や「妻」ではなく「女」としての時子に気づいた。上述した描写は、俊介の反省、あるいは俊介が危機感を感じてしまったことを示している。

その一方で、前節で述べたように、外国にいる俊介宛ての手紙に、時子が女として甘えるような言葉を一切書かず子どものことばかり書くことに対して、俊介も不満を感じるのだ。つまり、時子を女として見ていない一方、「妻」や「母親」ではなく「一人の女」として自分に甘えてほしい、という俊介の矛盾した心理が見て取れる。なぜこのような矛盾が生じてしまったのか。それはやはり、俊介の内心に残存している家父長的観念から起因しているのではないかと考えられる。俊介は「家」制度に見られる男女間の愛情表現を認めない儒教の観念に影響されたため、こうした矛盾を抱いていると言えるのではないか。

一方、時子にも俊介と同じような矛盾した心理が存在している。

²⁸桂容子『『女』を語る—ジェンダーの呪縛から解かれるために』（河野貴代美他編『シリーズ〈女性と心理〉第2巻 セクシュアリティをめぐって』新水社、1998. 8）P. 106

ジェンダーの規範にとらわれているため、夫と面と向かうと、自分のことよりも子どものことを先に考えてしまい、女として見てもらいたい意思を俊介に表明できなかった。こうした夫への不満や自己確認への欲求のために、時子は不倫に走ったのではないだろうか。

以上のように、俊介と時子は、話題やコミュニケーションの取り方の違い、夫婦の思いや考え方の違いのため、それぞれ不倫に走ってしまい、その結果家族もバラバラになってしまったと考えられる。したがって、時子の姦通事件は、単に家族崩壊の口火を切ったにすぎず、根本的な原因ではないと思われるのである。

5. おわりに

従来の読みは、もっぱら時子の姦通の非にばかり注目してきた。しかしこれまで見てきたように、二人の夫婦関係を追究してみると、姦通事件以前から二人の間で意思の疎通を欠いていた（しかもそれは古い慣習によるものである）ことが決定的要因となって、家族の崩壊という事態を招いたと言える。

女性は従来、家内役割、母性役割の中に強く押し込められてきた。そのため、戦後、制度的には「家」から解放されたとはいえ、精神的には依然として家内役割、母性役割の束縛から逃れられていないのが事実であろう。時子は確かに性的に自由奔放かもしれないが、しかし、彼女にはジェンダー規範にとられる一面も確実に存在している。一方、俊介も一見家長としての権威を持っていないように見えるのだが、実際は家父長的な観念を持つ一側面をも確実に伺わせている。特筆すべきなのは、俊介が外国文学に詳しい大学講師であり、アメリカ滞在の経験を持ち、主婦相手の座談会を兼ねた講演会にも出たりするような人物設定となっており、同時代の一般的な男性像とは違って、現代

的な思考にいち早く接する機会に恵まれてきた人物、あるいは現代的な思考を理想としている人物として描かれているにもかかわらず、作中の俊介の言動には従来の慣習にとらわれたものが多々見受けられ、彼が遭遇した理念と現実のギャップが浮き彫りになっている点である。

また、俊介は時子より二つ年下であり、しかも二人は高校生の息子と中学生の娘を持つことから、二人とも 30 代後半～40 代ぐらいの人物であることが推測できる。とすれば、俊介と時子は明治民法の中で育てられ、戦後の男女平等・女性解放などが公認された時代に家庭生活に入り、子どもを生き育てるに至った最初の世代に当たると考えられる。このような時代背景から考えてみれば、明治民法に代表される「家」制度と、新しい「家庭」の倫理との間に生じた葛藤が、俊介と時子の心に内面化されてしまったのも当然と言えよう。その意味では、作者が本作品に敢えて「抱擁家族」という題をつけたことには、実に、作者の時代へのアイロニーが込められていると考えられるのである。

確かに、戦後の民主主義は、女性解放や男女平等などの先進的な観念をもたらした。しかし、それを家庭における日常生活で実行する困難さを、『抱擁家族』を通して見て取ることができる。そのことは、長い間「家」制度に拘束されてきた人々が、そうした「家」的拘束から完全に解放されることの難しさをも物語っているように思われる。また、戦前の『『血』のフィクションによる『家』²⁹』とは異なり、『抱擁家族』は戦後の夫婦の愛情や情緒関係によってのみ形成・維持される『『愛』のフィクションによる³⁰』家族の脆さや不安定さをも描き出したと言えるのではないだろうか。

金井淑子は、戦後の改革によってもたされた変化として、女性が

²⁹ 諫山陽太郎『家・愛・性 近代日本の家族思想』（勁草書房、1994.6）P.192

³⁰ 注 29 に同じ。P.192

「戦前の家制度的な家父長制の縛りから」解放され、「家」という概念も「一応制度上はなくなった」のだが、「しかし、内実としての『家父長制』は、なくなったのではなく再編されたのだ」、と指摘している。³¹つまり、家父長制は戦後、制度上は廃止されたものの、内実では戦後の社会、しいて言えば、今日の日本の社会にも今なお残存しているのだということが分かる。そうした意味では、先述した俊介と時子が直面したさまざまな夫婦間の問題は、今日の日本社会においてもなくなってはいないことから、『抱擁家族』は時代を先駆した「傑作」であるのだと言える。またそれは、1965年に作品が発表された後も、半世紀に渡って人々に読み続けられている故でもあると思われるのである。

* テキストの引用は講談社版『小島信夫全集 3』（1971.2）による。

【付記】本稿は2010年度台湾日本語文学国際学術シンポジウム（2010年12月18日 於淡江大学）における発表内容に加筆・訂正を施したものである。

³¹注23に同じ。P. 153

参考文献

- 大井正(1980)。性と婚姻のきしみ。福村出版。
- 宮淑子(1984)。セクシュアリティ—女と男の性と生—。現代書館。
- 上野千鶴子(1986)。女という快樂。勁草書房。
- 上野千鶴子(1988)。女遊び。学陽書房。
- 千石英世(1988)。小島信夫 ファルスの複層。小沢書店。
- 西川長夫(1988)。日本の戦後小説：廃墟の光。岩波書店。
- 落合恵美子(1989)。近代家族とフェミニズム。勁草書房。
- 河野貴代美(1990)。性幻想：ベッドの中の戦場へ。学陽書房。
- 上野千鶴子(1990)。家父長制と資本制：マルクス主義フェミニズムの地平。岩波書店。
- 上野千鶴子他編(1991)。セクシュアリティと家族。岩波書店。
- 山崎浩一(1993)。男女論。紀伊国屋書店。
- 上野千鶴子(1994)。近代家族の成立と終焉。岩波書店。
- 松尾精文・松川昭子訳(1995)。親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム。而立書房。
- 牟田和恵(1996)。戦略としての家族。新曜社。
- 田端泰子他編(1997)。ジェンダーと女性。早稲田大学出版部。
- 青野由利他編(1997)。性差。専修大学出版局。
- 上野千鶴子他著(1997)。男流文学論。筑摩書房。
- 山田昌弘(1999)。家族のリストラクチュアリング。新曜社。
- 三浦展(1999)。「家族」と「幸福」の戦後史—郊外の夢と現実。講談社。
- 盛山和夫編(2000)。日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族。東京大学出版会。
- 角田由紀子(2001)。性差別と暴力。有斐閣。

永原慶二他編(2003)。家と家父長制。早稲田大学出版部。

坂内正(2009)。性—その深層と日常 小島信夫。近代文芸社。

加藤典洋(2009)。アメリカの影。講談社。

